

強行遠足新聞

発行所
甲府第一高校
生徒会係・新聞部
平成24年度版
第1号

何のために

校長 奥田 正直

長で、期待と不安が交錯していることと思います。

本校最大の伝統行事である第86回強行遠足が、来る10月6日〜7日に実施されます。一年生は初めて、二、三年生の女子は距離延



「何のために」実施されているのか、考えたことがありますか。この交通機関が発達した便利な時代に、夜を徹してひたすら歩く。この不合理で不条理な行為に何の意味があるのだろうと考えたことがあいませんか。
「実施大綱」には、「歩くこと

第86回強行遠足 自己の限界に挑戦

強行遠足の概要

今年の強行遠足は10月6日(土)、7日(日)に実施される。男子は学校から小海までの74・8km、女子は高根から小海までの43・2kmのコースを歩く。男子は6日の午後8時30分(クランド)に集合し、午後9時30分に出発、翌日の午後2時に終了する。女子は7日の午前5時に学校に集合し、バスで高根救護検印所である高根総合支所に向かい、午前7時に出発、午後4時に終了する。男子は16時間30分、女子は9時間の制限時間で行われる。
今年の強行遠足では、懸案であった

た女子の距離延長が実施される。平成14年強行遠足中の女子生徒の暴走車による痛ましい事故死から10年の節目に、女子の最終到達地点として小海が復活し、女子も慰霊地点を通過する。
男子だけでなく女子も一層、自己の体力の限界に挑み、日常では得られない貴重な体験を昨年以上に得てほしい。そのためには、体育での練習だけでは



【友だちと語り合いながら進む道のり】

個人練習の充実が大切である。かつての先輩たちは、強行遠足が近くと自転車道をやめて、徒歩

今年の変更点

女子のコース延長だけでなく、いくつかの変更点がある。
一つ目は、検印チェックがバーコード認証のみとなるので、氏名表や検印カードがなくなることである。そのため、名刺大の緊急連絡先カードを作成記入し、身分証

実施上の注意事項

服装は体育着を着用すること。ハーフパンツは禁止である。
男子の夜間歩行では、蛍光タスキを上着の上に必ず着用すること。寒さ対策及び天候の急変に対処

強行遠足まで1週間、心身ともに万全の体制で準備をしてほしい。

北見北斗高校強行遠足に 2年生4人が参加



【小海到着を喜ぶ北見北斗高生と一高生(甲府一高第84回大会)】

10月7日に行われる北海道北見市の北見北斗高校第80回強行遠足に2年生4人が参加する。「伝統校同士での同一行事による交流を通し、相互の理解を深め、将来にわたる両校の望ましい関係を構築する第一歩とする」ことを目的とし、平成4年から始まり、3年に一度両校の生徒が交互に派遣される。北見北斗高校は今年創立90周年を迎え、記念すべき大会となる。
この交流が行われることになったきっかけは、当時北見北斗高校の校長だった齊藤静之先生が大学時代に甲府一高出身の友人から強行遠足の話を聞いたことから始まる。北見北斗高校の卒業生であっ

がこれらの方々への感謝の気持ちを常に忘れずに、安全第一に歩き通して欲しいと切に願っています。
もう一つは、自分の身は自分で守らねばならず、やめる勇気もまた大事だということです。では、それぞれの旅路を無事に終えることを祈っています。
た齊藤先生は、話を聞いたときに「自分がかもし母校の校長に就任したら、甲府一高と強行遠足による交流をしたい」と思った。そうして三十年あまり経った後に北見北斗高校校長に着任。創立70周年の記念行事の一つとして、甲府一高との強行遠足による交流を甲府一高の広瀬重雄校長に提案した。こうして平成4年10月、第一回交流が行われることとなった。
北見北斗高校の強行遠足は男子71km、女子41kmで行われる。また来年は北見北斗高校の生徒が一高の強行遠足に参加する予定。両校ともに長い歴史と伝統を誇る強行遠足。両校の参加生徒は、その歴史の重みを感じつつ、充実した走り、交流を深めている。

強行遠足に関する情報確認

一高HP
<http://www.first/kai.ed.jp/>
※携帯電話からも確認できます。
ラジオ放送 (YBSラジオ 765KH)
10月6日 1回目(11:56)YBSラジオニュース
2回目(17:50)YBSラジオニュース



○参加生徒

- 望月光樹(2年ウ組)
- 中込 杏(2年フ組)
- 伊藤永莉(2年I組)
- 長坂 優(2年G組)

○引率者

- 高橋博之教頭
- 三枝浩樹先生
- 金丸信吾同窓会副会長
- 大西 勉同窓会事務局長

する万全の準備をすること。特に寒さ対策の「ウインドブレーカー・手袋等」、雨対策の「ポンチョ・カッパ等」は必需品である。
携行品では、水分補給の自分用コップ、男子の懐中電灯を忘れないうこと。また、懐中電灯の電池が新しいものになっているか、必ず確認することも大事である。

非日常的な1日

体育振興主任 中澤 達彦



生徒諸君、今回の「強行遠足」に対する意識はどうですか。二、三の妥協と我慢を併せて、

「精根限り歩く」という精神に基づいて大正13年(1924年)にはじまった「強行遠足」。その理念は、「自分の体力に応じて、歩けるだけ歩く」というものであり、決して順位や距離を競うものではありません。

非日常的な時間の中で、悩み、もがき、苦しみ、そして雑念と対峙し、痛む足を引き摺りながら独り黙々と歩き続けることは、日常では気付かない「自己と向き合う」貴重な体験が出来ることでしよう。

特に今年は女子の距離が13km延長され、43.2kmとなり、終点が男子と同じ小海となりました。また、北海道北見北斗高校との交流年でもあり、本校から2年生男女4名が参加します。しかし、残念なことに日程が重なりこの4名は、本校の強行遠足に参加することはできません。場所は違いますが思いは同じです。本校の代表

として、その責任をしっかりと果たしてきてもらいたいと思います。

御協力をいただいている多くの方々への感謝の気持ちを忘れず、自己の限界に挑戦し、

一高の伝統精神を受け継いでいてもらいたいと思います。



【保護者の方々が作ってくれた温かいしじみ汁をいただく生徒たち (野辺山救護検印所)】

先生たちの強行遠足体験記

「強行遠足の意味」

2年6組 担任

秋山 尚克

私が高校生のころは午後2時くらいに一高を出発して翌日の昼の12時まで小諸市役所に到着するコースでした。高校1年生のとき、運動部で活躍していた友人は翌日の小諸発の始発電車(通称「クローリ」)に乗るか、それ

ぞれに意味を見つけ取り組んでいました。しかし、私は「おだなあ」とか、「でも」「山梨県を越えないのも情けないなあ」とかいう消極的な動機はあったものの、この行事に対して意味を感じていませんでした。一方で、同じ吹奏楽部の先輩たちはやたらと盛り上がり、臼田(70km地点くらい)まで行かなかったら坊主にしよつとか決めていました(もちろん先輩の我々もその盛り上がり飲み込まれて



きました)。さて、実際に始まってみるとそんな心の逡巡は最初の検印所くらいまで。後はとにかく前へ、右足の次には左足を前へ。長い先のことより、今の一步を先へ進めること。これが前に進むために大事ななんだと身を持って体験し、これ

「んん」
1年1組 担任
小林 夕希

私は強行遠足が大嫌だった。女子は須玉から小海まで47kmだから男子に比べれば・・・などと言われても、教室から購買までの距離すら遠いと思うものぐさな私にとって、それは天文学的数字の苦行だ。1年の頃は自主練なんてものは一切せず、ペースもめちゃくちゃ、案の定、小海の手前・松

が私にとっての強行遠足の意味となりました。この行事が何十年も続き卒業してからも話題になるのは、単一の意味に回収されない豊かさを秘めた行事だからなんだと思う今は思います。皆さんにこんな意味づけをされる行事なのでしょうか。3回の強行遠足の度に皆さんにしか体験できない意味づけが、でき

れば面白いものとしてなされるとうれしく思います。さて、余談ですが、この年白田のりんごをたっぷり食べてしまった私には、次の年りんごを持って帰ってくるという新たな意味が加わったのでした。

原湖の前進停止時刻に間に合わなかった。だから2、3年では、夏休み明け約1か月間、仕方なく毎日敷島から徒歩で通学することにしました。あくまで走らない、だけどやたら早足で山の手通りを歩く、怪しい女子高生だったと思う。THE BOOMのベストを聴きながら歩いた。今でもBOOMがTVで島唄を歌っている、沖縄よりも強行遠足を思い出す。そんな自主練のかいあって2年間間は小海到達でも、おそろしく治道の応援を何度も睨んでしまったし、「検印所まであと1km」の看板に

た。また、走っていて驚いたことは強行遠足を支えて下さる先生方をはじめ、保護者やOB、地域の方々が多かったです。夜遅くにもかかわらず、検印所以外にも地域の方々から給水所を設けてくださり、治道からはたくさん声を掛けてもらいました。一高の強行遠足の伝統の凄みを肌で感じる事ができました。

もちろん楽しい思い出だけではなく、大泉の急な坂道はあります。一高の強行遠足は、支えて下さる方々に感謝しながら、今年の強行遠足も楽しみたいと思います。



強行遠足の思い出

3年2組 佐野 拓真

では止まりそうになり、まきは過ぎたあたりからは足がすりそうになりました。ただ、応援のおかげもあり、あきらめずに小海まで走りきることができました。自分の限界に挑戦できた達成感や喜びは今でも記憶にあります。

一高の強行遠足は、支えて下さる方々に感謝しながら、今年の強行遠足も楽しみたいと思います。

護者もOBもこの行事に関わる人は皆同じ気持ちだろう。一高生はずいぶんやっております。だからこんなに協力者がいるんだ。それが良かった。結局それから3年連続で松原湖検印所のお手伝いをさせてもらった。あの痛ましい事故の年も、私は検印の補助をしていた。ショットクが大きく、正直来年はないと思う。でも、ご遺族のご意向やたくさんの方々の支えで強行遠足は続いている。



山梨県立甲府第一高等学校 強行遠足 女子出発地点

「嘘つけ!」と悪態をついたし、毎年ゴールで「もうやりたくない」と思った。そんな私がなぜか卒業後、強行遠足のお手伝いに行くことになった。卒業してから見る強行遠足は全然違っていた。汗まみれの顔も、マフがつぶれて血のにじんだ靴下も、半泣きで鼻水を垂らしている女子も、みんな尊く輝いていた。「じゃあ行きます!」と言って検印所を出て行く姿に、心底「頑張れ!」と思った。先生も保

そして私自身、母校の教員となった。私の強行遠足は、形を変えて続いている。